

巻頭の言葉

京都文教大学人間学研究所 所長 小林 康正

昨年来、人間学研究所の仕事は20周年事業を巡って動いてきた。2016年10月1日には、「20周年記念シンポジウム」を実施し、その記録は本紀要にも掲載されている。またこれに合わせて20周年史の『人間学研究所 20年の歩み』を刊行した。これら一連の成果は、所員、事務局を中心に多くの関係者の援助によって成し遂げられたものであった。あらためて感謝の言葉を述べておきたい。

さらに、これらの記録に加えることができなかったが、10月には研究所の初代所長別府春海ご夫妻を迎えて、研究所創設時のお話を伺い、関係者とともに旧交を温める機会を得たことは望外の喜びであった。

この間いくつかのことが頭を巡ったが、やはりそこを離れなかったのは「修史」という作業の意味であった。学園としての歴史はともかく、20年という短い歴史しかもちえない大学にとって歴史を記録するということは、ごく一部を除いて本学においても初めての試みであった（学園百年史に大学の記載がある）。一研究所という小規模のものであっても、20年となれば、それなりの堆積がある。20年来実施されたシンポジウムやイベント、紀要に記載されたプロジェクト派生の個人研究など、数え上げればきりが無い。これらの「史料」を振り返る作業を通じて、いったい何を選び、どのように記述すればよいのかということに頭を悩ませたわけである。

この逡巡は20周年史にも本紀要のシンポジウムの記録にも記したが、結局は私の「史観」に従うしかなかった。だから、おそらく私と別の人が書けば、また別の20周年史ができたであろう。すべての歴史は現代史すなわち、歴史叙述であるという格言のとおりだ。

そして、2016年という「現在」にいる私の場合は、「大学（しかし、それは一般の大学ではなく、京都文教大学という固有の存在）における研究の価値とは何か」、「大学の研究はどのように進められていくべきか」、そして最終的には「人間学研究所はそこにおいてどのような貢

献ができるのか」という、素朴ではあるが切実な問いを抜きにこの叙述を行うことはできなかった。

この編纂作業はまた別の面から言えば、「歴史の発見」でもあった。私が抱いたような問題意識をかつての研究所の歴史の中から探り出すことであったからである。先人たちはこうした問いに対してその折々にどのような答えを出していたのか。この点については、シンポジウムの記録と20周年史において触れたので、ご覧いただければ、ありがたいが、一言でいえば、「資産と問いの再発見というプロセス」についてのものである。未明に帰した資産を再発見し、かつての問いを現在の地点から問い直す。この循環的な試みこそが歴史を築いていく営為であるということであった。

個人でなく、社会的な使命をもった組織体である限り、私たちは否が応でも前進していかなければならない。それはある意味で宿命といえるかもしれない。だが、その前進は過去を切り捨てることによって成し遂げられるものではない。過去の資産と問いに学びつつ、現在に折り合いをつけて新たな地平の中でこれらの価値を問い直すことこそ、歴史を築く営為となっていくのではないか。20周年史を編んで思うのは、たかだか20年の歴史しか持たない私たちにとってこのことを記憶することはとても重要なことだということである。

こうした課題は人間学研究所だけのものではない。研究所は幸いにも史料を豊富に持っていたが、20年を経て他の部局では史料が失われているのではないか。さらに学部学科の改組転換を経て、もはや尋ねるべき史料が残されていないばかりか、そこには問う主体すら存在していないのではないか。そうならば、この20年の歴史をいったい誰がどのような現在において問うべきなのか。早急に考えておくべき課題であろう。それは単に過去を残すためではなく、現在の私たちを位置づけるための必須の作業である。